

パニック値の検証 年度比較

◎千葉 優希¹⁾、藤野 幸恵¹⁾、千田 百合子¹⁾、後藤 明美¹⁾、高橋 幹夫¹⁾
岩手県立磐井病院¹⁾

【目的】

当院は305床の急性期病院である。パニック値は25項目であり、報告手段は測定を実施した検査技師が担当医へ直接電話連絡する方法である。今回、報告したパニック値について集計解析し2016年度と2017年度を比較検討した。更には、医師の対応について調査した。

【方法】

2016年度にパニック値として報告した1444件、2017年度に報告した1233件を、項目別に集計解析した。更には、報告を受けた担当医の対応を電子カルテの診察記事で確認した。

【結果】

2016年度の報告上位5項目は好中球数1000/ μ L以下が233件(16.1%)、白血球数1500/ μ L以下が94件(6.5%)、CK1000U/L以上が85件(5.9%)、白血球数25000/ μ L以上が83件(5.7%)、ヘモグロビン6.0g/dL以下が82件(5.7%)であった。2017年度の報告上位5項目は好中球数1000/ μ L以下が200件(16.2%)、BUN70mg/dl以上が74件(6.0%)、CK1000U/L以上が71件(5.8%)、白血球数1500/ μ L以下が67件(5.4%)、K6.0mmol/L以上が65件(5.3%)であった。年度比較ではCREが2016年度の22位から9位となった。更に、担当医の対応有りが2016年度は54.6%で、2017年度は67.3%であった。この内、好中球数1000/ μ L以下に対しては2016年度55.4%で、2017年度70.5%であった。

【考察】

2016年度と2017年度の上位5項目ではBUNが7位から2位になり、同様にCREも上位に上昇したが、その要因としては腎不全や脱水を原疾患とする患者数が増加したことが示唆された。

また、医師の診察記事に、パニック値報告内容を記載した件数が増えた原因としては、2016年度の内容を院内の会議に報告し、医師へ周知したことが考えられる。管理会議や医療安全委員会で大きく取り上げられたことが要因と思われる。

【結語】

パニック値報告は医療安全上重要であり、医師への直接報告が基本である。今後も院内周知を継続実施し、医師からの診察記事掲載を薦めたい。

岩手県立磐井病院臨床検査技術科：0191-23-3453（内線：1160）